



2006.7.3 No.1

1. 所長挨拶
2. 活動報告
3. 専任教員より一言

山口市吉田 1677-1 時間学研究所

URL: <http://www.rits.yamaguchi-u.ac.jp/>



## 1 所長挨拶

時間学研究所長 辻正二

この4月から研究所の所長の仕事を引き受けることになりました。時間学研究所は、広中学長時代に「時間という観点から多くの学問分野の協力によって新たな学際領域を創造し、21世紀における社会と人間の新しい価値観を探求する」ための研究を目指して設立されました。この4月で設立されて足かけ6年、また、新時間学研究所になって1年半が立ちました。この間、初代の井上慎一所長、二代目の藤島政博所長の尽力により、研究所の体制は少しずつ整備されてきましたので、それを継承し、さらに発展させることが私に与えられた役割と思っています。時間を学際的に研究し、学問の発展と社会への貢献がより一層できるように尽力したいと考えています。

研究所は、井上慎一教授、鎌田祥仁助教授の二人に加えて、この4月に新任の青山拓央講師を迎え、3人体制になることができました。これで理系の研究者2名、文系の研究者1名のスタッフ体制となり、文理融合を目指すという時間学研究所の理念にある程度かなう体制となりました。18年度には4部門(理論的時間研究部門、自然的時間研究部門、社会的時間研究部門、応用的時間研究部門)に15件の

時間学研究所プロジェクトの希望があり、今後これらの研究を結びつけて新たに研究所独自のプロジェクトを創るという仕事もありますので、初心に返った気持ちで頑張りたいと思います。

この「ニューズレター」もしばらく休刊していましたが、学内向けに年4回の割合で発刊の予定で、今後、研究所の具体的活動である時間学の研究成果、学術講演会や研究発表会、公開講座などを紹介してまいります。

「多くの学問分野の連携による時間に関する研究を総合的に行ない、本学の特色となる新たな学際領域の創造と研究成果の社会還元」が、現在の山口大学・時間学研究所の目的であり、研究所にとっての使命と考えています。この研究所が時間研究に関するシンクタンクになることができると考えていますので、どうか気軽に研究所を利用してくださいませようお願いします。



## 活動報告

現在、ホームページのリニューアル準備中です(URL は本紙タイトル部に記載されています)。講演会などの告知や詳細、昨年度までの活動については、こちらに掲載の予定です。下記に、最近のおもな活動を紹介します(この他にも、時間学についての解説を一般誌に寄稿しました)。

・5月26日に、時間学研究所・応用時間学部門の報告会が行なわれました。発表者は、一川誠助教授(工学部)、松富直利教授(農学部)、井上慎一教授(時間学)の三名です。また同日参加できなかった鶴田良介講師(医学部)より、発表資料の配付もありました。

・7月7日(金)午後3:30より、吉田キャンパス総合研究棟3階のフォーラムスペースにて、時間学セミナーを開催します(参加自由)。さまざまな分野から8名の教員が集い、約15分ずつ、広い分野の聴衆に向けた発表を行ないます。発表者と演題については、ポスターやメールでの案内をご覧ください。

・やまぐち街なか大学にて、連続講義「時間学」を開催しています。

第1回 6月11日 「現代社会と時間学」 辻正二（時間学研究所長）

第2回 7月16日 「認知科学と時間」 一川誠（工学部助教授）

第3回 8月6日 「地球と進化」 鎌田祥仁（時間学研究所助教授）

第4回 9月10日 「死と時間」 青山拓央（時間学研究所講師）

第5回 10月1日 「生命と時間」 井上慎一（時間学研究所教授）



## 専任教員より一言

現在、時間学研究所には、三名の専任教員がおります。それぞれ、異なる研究分野を専門としており、学際的な時間学の構築を目指しています。研究内容の紹介を兼ね、各教員より簡単なコメントを掲載いたします。

### < 枯野をかけ廻りながら >

時間学研究所教授 井上慎一

このごろ時間の経つのがとても速い。ついこの前、正月の挨拶を交わしたと思ったのに、もう6月だ。このぶんでは、すぐに自分の人生も終わりになってしまいそうだ。そんな焦りから、時間について考え始めた。時間をどうこうできるなどとは考えていないけれど。

時間は目に見えないし、本当は時間などないのではないかという哲学者もいる。でも時計は確かに今は4時24分だと教えているし、時間に追われて暮らしていることも確かなことだ。だって、授業に遅れたら、学生に注意する。そうしたら、自分が遅れるわけにはゆかない。いくらもがいても時間に自分の生活が支配されている。まるで、時間に、あれやれ、これやれと指示されているみたいだ。やはり、時間をどう考えたら幸福で豊かな社会ができるのか、考えておくことは悪くない。

ホーキングという難病を背負っている理論物理学者は時間が137億年前に始まったと言っている。遺伝子は何百万年に1塩基が変わる程度の速さで変わってきた。その遺伝子に記録されている設計図に従って私は母親の胎内で280日かかってできあがった。それもいつか、もうすぐかも知れない時期に、土に帰る。スケールは違うけれど、どれも時間に関係した現象だ。

## <地層という史>

時間学研究所助教授 鎌田祥仁

砂や泥が重力に従って沈積してできた地層、特に堆積岩は、きれいな縞々模様を作り出します。そこには、地球の環境変化や生物の進化はもちろん、潮汐やミラノビッチ周期(地球の公転軌道の離心率と地軸の歳差運動に起因する日射量の長周期変動)など様々な、現象を記録しています。つまり地層は地球史のテープレコーダーということになり、不可逆・可逆な時間的現象を問わず、生の声を録音していると考えることができます。このような地質学的・古生物学的視点から議論する時間というのは、何億年、何千万年、または何万年というようなオーダーを扱うことが多くなります。私たちはせいぜい長生きしても百年ですから、自分の人生の100倍から100万倍もの時間スケールを議論していることになります。このようなスケールの時間というのは簡単に実感することができません。しかし一方で、私たちは今流れている一分・一秒であっても、それを直接見ることはできません。このテープレコーダーをいろいろな方法で再生することで、私たちは過去の出来事を知ることができます。将来、画期的な再生方法を発見し、時間、そのものを観察できる時代がくるのでしょうか？

## <哲学的時間論>

時間学研究所講師 青山拓央

時間学には二つの側面がある。一つは物事を時間的に分析することであり、もう一つは時間そのものを分析することだ。前者はどちらかといえば、常識的な時間概念を前提として、研究や調査を進めていく。後者はそうした常識を疑い、よりの確でつじつまのあった時間概念を探し求める。

私の専門である哲学的時間論は、もっぱら後者に関わっている。その意味で哲学的時間論は、文学研究や思想史よりも、論理学や物理学に近い(このように述べたほうが、誤解の度合いは少ないと思う。過去の哲学者が言ったことは、新たに考えるための素材にすぎない)。じっさい、私の取り組んできたテーマも、タイムトラベルの論理的可能性や、意識と身体(脳)の同時性といったものであり、こうした研究を続けることで、時間の正体に迫ろうとしている。時間という概念は、原因と結果や、確率、自由、そして死といった、さまざまな概念と関わっているため、時間についての新たな見方を得ることは、世界についての新たな見方を得ることもある。